

2018 年度事業報告

(自 2018 年 2 月 1 日～至 2019 年 1 月 31 日)

公益社団法人 日本薬学会

I はじめに

日本薬学会は薬学における中核的学術団体として、医薬品の創製、製造、有効性と安全性、供給、適正使用、生体での作用機序に関する情報発信・交換・支援をはじめ、広く医療機器、再生医療、予防医学や生命科学に関する学術や産業の発展に貢献してきました。また薬剤師教育・薬学に関わる人材育成に関して文部科学省、厚生労働省、日本薬剤師会、日本病院薬剤師会、医薬品関連産業界や健康・医療関連産業界等との連携を基に、責務を果たしてきたと考えています。2018 年度に取り組んだ主な事項について以下に示します。

- ① 日本薬学会の最大の学術活動となる第 138 年会（金沢）が、2018 年 3 月 25～28 日に「次世代に向けた創薬・医療イノベーションの今」をテーマに、金沢大学の向智里組織委員長の下で開催され、活発な発表と討論が行われました。本年会にはドイツ薬学会（DPHG）の代表者をお招きし、ご講演を賜るとともに交流を深めました。
- ② 学会の支部・部会は、個々の計画に基づき学術活動を活発に行いました。また新たな試みとして支部長会議と部会長会議の交流を図り、公益社団法人としての支部・部会の位置づけを共有しました。
- ③ 学術誌の更なる充実発展を目指し、YAKUGAKU ZASSHI では臨床薬学分野の英文を含む原著論文やケースレポートの投稿への支援を強めました。また Chemical and Pharmaceutical Bulletin、Biological and Pharmaceutical Bulletin に関しては J-STAGE と連携し、国際発信力の強化に努めました。さらに生物系オープンアクセスジャーナルとして、環境・衛生部会の協力を得て BPB Reports が発刊されました。今後の発展を期待しているところです。学会誌ファルマシアは本学会会員を含め多くの薬学関係者に有効な情報を提供しています。
- ④ 学会主催の創薬セミナー、全国学生ワークショップ、若手教育者のためのアドバンスワークショップ、日本学術会議との共催シンポジウム等を本年度も開催し、多くの成果が得られたと考えています。
- ⑤ 文部科学省委託事業として「平成 25 年度改訂薬学教育モデル・コアカリキュラムの実施状況に関する調査・研究」を実施し、アンケート調査とワークショップを通して薬学教育の改善・充実にむけた足場形成の第一歩を踏み出しました。
- ⑥ 今年度も長井記念薬学研究奨励支援事業により博士課程大学院学生の勉学支援が行われました。

これらのほか、韓国薬学会（PSK）年会へのシンポジスト派遣と PSK 年会におけるアジア諸国の薬学会との交流、英文を含む日本薬学会ホームページの刷新、日本薬学会の行動規範の制定と公表、薬学会館の空調設備の更新、バリアフリートイレ（地下 2 階）の改修を行ったほか、シニアメンバーを中心に薬学会会員制度の改善、薬学会の国際化と FIP（国際薬学連合）や AFMC（アジア医薬化学連合）との連携の在り方などについて検討をはじめました。

II 事業実施状況

1 代議員総会の開催

日 時：2018年3月25日（日）

場 所：金沢東急ホテル5階 ボールルーム

2 学術研究・教育活動の推進

1) 学術誌の発行

学術誌3誌の特性を最大限に活かした原著論文・総説の掲載により、薬学ならびに関連分野における科学の発展に寄与してまいりました。

本学会の学術誌への投稿意欲を高めるために、査読期間の短縮、出版までの作業の効率化を継続的に推進してまいりました。また、英文誌では海外からの投稿を増やすための調査と準備を行ってまいりました。

YAKUGAKU ZASSHI では臨床薬学領域研究の多様化に対応するため、臨床薬学領域の英文投稿およびケースレポートを受け付けました。

Chemical and Pharmaceutical Bulletin ではテーマを絞った、関連分野の研究者が興味をもつ内容のカレントトピックスを掲載しました。

Biological and Pharmaceutical Bulletin では誌面の充実を目的とし、著名な研究者に総説の執筆を依頼いたしました。

2018年度の学術誌の刊行は、以下のとおりです。

① YAKUGAKU ZASSHI 第138巻

掲載論文数：190編／昨年比6編増

（早期公開9編／昨年比2編減、英文投稿16編／昨年比10編増）

発行部数：700部（月刊）

② Chemical and Pharmaceutical Bulletin 第66巻

掲載論文数：166編／昨年比2編減

（早期公開31編／昨年比3編増）

発行部数：650部（月刊）

③ Biological and Pharmaceutical Bulletin 第41巻

掲載論文数：265編／昨年比46編減

（早期公開57編／昨年比6編減）

発行部数：650部（月刊）

2) オープンアクセスジャーナルの発刊

新たな生物系オープンアクセスジャーナルとして、BPB Reportsが発刊されました。BPB Reportsは、完全オープンアクセスの電子版学術誌です。投稿者の幅広いニーズにこたえるために、学術誌3誌では扱わない「Report」という論文カテゴリーを設けました。

BPB Reports 第1巻

掲載論文数：8編

3) 国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）との連携

高度情報化社会の趨勢と、本学会の公益性を視野に、学術誌3誌を発行日と同日にJ-STAGEにて全文公開をいたしました。

本学会の学術誌に関する取り組みにつき、国内の関係者へセミナーを通じて紹介いたしました。

2) 学術研究集会の開催および部会・支部活動の支援

(1) 年会の開催

年会は、領域の異なる研究者が一堂に会して、薬学の進歩を横断的に知ることのできる全国規模の大会です。特にシンポジウムの企画・募集にあたっては、多様な領域を包含できるものとなるよう留意してまいりました。第 138 年会および第 139 年会について、組織委員会を中心に次のとおり企画ならびに開催しました。

①第 138 年会（金沢）

日 時：2018 年 3 月 25 日（日）～28 日（水）

場 所：石川県立音楽堂、金沢市アートホール他

テーマ：「次世代に向けた創薬・医療イノベーションの今」

組織委員長：向 智里（金沢大学）

②第 139 年会（千葉）

日 時：2019 年 3 月 20 日（水）～23 日（土）

場 所：幕張メッセ、ホテルニューオータニ幕張

テーマ：「智の継承、そして発展」

組織委員長：牧野公子（東京理科大学）

(2) 部会の活動

部会は、薬学研究の高度化と若手研究者や薬学生の育成を共通の主要課題とし、シンポジウム、フォーラム、研究会等を開催するとともに、創薬研究者の育成等、各部会の環境、状況にあわせて特色ある活動を進めてまいりました。また、部会間で協力し、他機関との連携を図りました。

本年度の部会活動の詳細は（別紙 1 P10～）のとおりです。

(3) 支部の活動

支部は、会員が日本薬学会を身近な存在として活用できる場です。学生会員の積極的な参加を促す学術集会、地域薬剤師会との交流、薬学講習会での最新情報の入手、支部表彰事業ならびに高校生への薬学ガイダンス等地域の特性を生かした事業展開を行うよう努力してまいりました。一般社会へ薬学の正しい理解を広げるとともに、若い世代へ積極的に働きかけを行い、会員増強運動を進めました。

本年度の支部活動の詳細は（別紙 2 P25～）のとおりです。

(4) 創薬セミナーの開催

本セミナーは、創薬に係わる最先端の話題と情報を提供し、今後の創薬に関して有益な議論をする場として、毎年開催しております。第 34 回セミナーでは、前回と同様に、社長講演、招待講演、自由討論会等を実施して、若手創薬研究者がグローバルな視野で最先端創薬を考える場を提供しました。

・第 34 回創薬セミナー

日 時：2018 年 7 月 11 日（水）～13 日（金）

場 所：Royal Hotel 八ヶ岳

3) 学術研究・教育活動の奨励・表彰

(1) 研究奨励

日本薬学会では、博士の学位を有する多様な薬剤師あるいは薬学研究者を輩出す

ることを使命として、学位を取得するための研究奨励支援を行うべく、2015年度より採用者へ奨励金の貸与を開始しました。2016年度より設置しました長井記念薬学研究奨励特別委員会では、運用手続きの整備を行いました。当年度採用者を加え、貸与を継続し、また、選考委員会による選考結果を受け、2019年度採用内定者を決定しました。

(2) 授賞

薬学研究の奨励・表彰は、日本薬学会の目的である薬学の進歩・普及にとって重要な事業です。授賞規定に基づいて選考された公正な選考結果を受け、2019年度学会賞受賞者を決定しました。

- | | |
|-----------|----|
| ① 薬学会賞 | 4件 |
| ② 学術貢献賞 | 3件 |
| ③ 学術振興賞 | 6件 |
| ④ 奨励賞 | 8件 |
| ⑤ 教育賞 | 1件 |
| ⑥ 功労賞 | 2件 |
| ⑦ 佐藤記念国内賞 | 1件 |

(3) 他機関関係賞等への推薦

各財団・機関から本学会への関係賞等の推薦依頼に対し、会員から候補者を選考し、推薦しました。さらに、国（省庁）による表彰について会員から候補者を推薦しました。

4) 薬学教育基盤の整備

薬学教育に関する諸課題について、日本薬剤師会、日本病院薬剤師会、日本医療薬学会、薬学教育協議会、全国薬科大学長・薬学部長会議、ならびに日本学術会議薬学教育分科会等と連携し、取り組みを推進してまいりました。

(1) ワークショップの開催

本年度は次のとおりワークショップを開催しました。

・第8回全国学生ワークショップ

日時：2018年8月11日（土）～12日（日）

会場：クロス・ウェーブ府中

テーマ：「6年制薬学教育に望むこと、卒業後に取り組んでいきたいこと～将来への想いを共有しよう」

実行委員長：田村 豊（福山大学薬学部）

・第4回若手教育者のためのアドバンストワークショップ

日時：2018年10月6日（土）～8日（月）

会場：クロス・ウェーブ府中

テーマ：「卒業時における教育の質保証～卒業時に求められる資質・能力とその評価を考える～」

実行委員長：河野 武幸（摂南大学薬学部）

(2) 文部科学省委託事業の実施

「平成29年度大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業『薬学教育の改善・充実に関する調査研究』」を受託し、改訂モデル・コアカリキュラムの英訳を行ったほか、意見を聴取し海外調査を行いました。その結果は第138年会（金

沢)でのシンポジウムにて公表し、報告書を発行しました。また、現在は「平成30年度大学における医療人養成の在り方に関する調査研究『平成25年度改訂薬学教育モデル・コアカリキュラムの実施状況に関する調査・研究』」が進行中です。

(3) 第三者確認作業

社会に資する生涯研鑽支援活動の一環として、健康サポート薬局に係る研修プログラムを確認するための第三者機関として、2016年に厚生労働省から指名を受けています。今年度は前年度までに適合とした6機関からの更新申請を受けて確認作業を行い、6機関に適合通知を発出しました。

3 学会情報の配信

日本薬学会の大きな役割に、信頼できる科学情報を発信していくことが挙げられます。薬学の学術教育研究、医療における薬学の貢献、さらには薬学分野の行政・産業等の最新の動向を、会員間のみならず広く社会と共有し、医療健康福祉社会の発展に寄与するために、最適な手段と場、媒体を準備・提供し、会員間の情報交換および会員と非会員・社会一般との接点を拡大し、情報の交流を促進しました。

(1) 社会への発信

今年度、該当する事案はございませんでした。

(2) 会誌の発行

会誌「ファルマシア」は、会員の広報誌として内外の情報を分かり易く提供し、また会員相互のコミュニケーションの円滑化をはかることを基本として編集しております。学会広報および情報誌として一層の充実をはかるべく、特集号(6回)とミニ特集号(5回)の企画を含め、年間12号の発行を実施しました。J-STAGE登載の周知や最新情報の発信に向け、HPの迅速な更新を努めました。

第54巻 発行部数 約17,000部(月刊)

(3) ホームページの更新

学会の最新情報の掲載ならびに会員へ向けての情報公開に日々努めました。対外的な情報発信を強く意識し、若い世代へエールを送り、薬に関心を持っていただけるようページを更新しました。

(4) メールマガジンの配信

メールマガジン「ファームナビ」は、配信を希望する Pharm パスポート登録者に「日本薬学会理事会だより」として日本薬学会の動向やメッセージを速やかに配信し、学会情報の共有化をはかりました。また、会員への一斉送信用のツールとしても活用しました。

配信6回 平均配信対象者数:17,800名/配信

(5) 刊行

薬学普及啓発誌の「高校生のための薬学への招待」と「これから薬学をはじめあなたに」の年間の利用は40,000部に達しています。高校生の進路指導資料として、また大学1年生のガイダンス資料として、薬学ならびに薬学部への正しい理解と知識を深

めることに寄与しています。

現在 2020 年度の 2 誌同時の全面改訂に向けて、編集作業を進めています。

4 他機関との交流協力とグローバル化の推進

1) 他機関との交流協力

他機関との交流と協力をはかり、広く社会に貢献するよう努めました。

① 日本学術会議との連携

薬学の存在感を高めながら、我が国の科学技術の推進に寄与するため、科学者コミュニティを代表する機関である日本学術会議薬学委員会との連携・協力を保ち、共同主催にて以下のシンポジウムを開催しました。

- ・「ビッグデータの創薬と医薬品適正使用への活用に向けた提言」

日 時：2018 年 11 月 20 日（火）

場 所：日本学術会議講堂

共同主催：日本学術会議薬学委員会医療系薬学分科会

- ・「創薬の加速化を担う構造生物学の最前線」～分子レベルから原子レベルの新しい解析技術の発展と応用～

日 時：2018 年 11 月 21 日（水）

場 所：日本学術会議講堂

共同主催：日本学術会議薬学委員会 化学・物理系薬学分科会、薬学委員会生物系薬学分科会、化学委員会物理学委員会合同結晶学分科会

- ・「生体イメージングから創薬へ」

日 時：2019 年 1 月 18 日（金）

場 所：日本学術会議講堂

共同主催：日本学術会議日本学術会議薬学委員会生物系薬学分科会、日本学術会議薬学委員会化学・物理系薬学分科会

② 共催・協賛・講演

本学会と密接な関連をもつ団体の講演会、学術集会を共催、協賛あるいは後援（別紙 3）（開催：国内 166 件、国際 10 件）し、積極的に支援してまいりました。

③ 日本化学連合への参画

④ 日本学術振興会への参画

卓越研究成果公開事業におけるデータベース改修ならびにデータ掲載に向け協働しました。

2) グローバル化の推進

諸外国の薬学関係団体ないし薬学関係者との交流を行い、これにより本会の国際的地位向上および薬学の国際的振興に寄与しました。

① 国際薬学連合（FIP）に関する活動

- ・第 138 年会（金沢）にて「FIP フォーラム」を開催しました（3 月 27 日）。
- ・FIP 年会（9 月 2～6 日、グラスゴー）へ代表者 4 名を派遣しました。同年会期間中、FIP に加盟する日本の 4 団体（本会を含む）が合同で「Japanese Reception」を開催しました。
- ・BPS Meeting（科学部門会合。FIP 年会期間中および 1 月に各 1 回、ハーグおよびグ

スゴー)へ代表者2名を派遣しました。

② 交流協定に基づく交流

- ・ドイツ薬学会 (DPhG) 第 138 年会 (金沢) へ同会代表者 2 名を招待し、講演を開催しました (3 月 27 日)。また、第 36 回メディシナルケミストリーシンポジウム (京都) へ同会代表者 1 名を招待し、講演を開催しました (11 月 29 日)。
- ・韓国薬学会 (PSK) 同会年会 (10 月 17~19 日、済州島) へ代表者 1 名および講師

師

2 名を派遣し、同会との合同シンポジウムが開催されました。

③ その他

- ・アメリカ薬学会 (AAPS) との交流協定が同会の事業再編にともない事実上失効したことから、同会との交流活動は行われませんでした。
- ・主催者からの要請に応じ、「DUPHAT 2018」(Dubai International Pharmaceuticals & Technologies Conference & Exhibition 2018。2 月 27 日~3 月 1 日、ドバイ) へ講師 1 名を派遣しました。

5 学会基盤の整備・確立

1) 会員関連

(1) 会員増強への取り組み

次世代へ向けて、より一層の発展を目指すためにも、会員は、学会の基盤であり財産です。多岐に亘る薬学の学術の魅力の向上を計り、会員増強へ繋げてまいりました。

(2) 会員登録状況

会員数 (2019 年 1 月 31 日現在)	17,087 名
正会員	16,825 名
	(一般会員 14,192 名)
	(学生会員 2,633 名)
永年会員	185 名
有功会員 (第二項)	38 名
名誉会員	39 名
賛助会員	199 機関

2018 年度末 (2019 年 1 月 31 日) 現在、正会員のうち 1,068 名が 2018 年度会費未納者でした。

(3) 名誉会員の推薦

定款第 5 条に基づき、理事会において名誉会員候補者 2 名の推薦を決定しました。

名誉会員 長野 哲雄
本庶 佑

(4) 有功会員および永年会員の決定

定款第 5 条に基づき、理事会において有功会員 1 名と永年会員 12 名を決定しました。永年会員には、記念品を贈呈いたしました。

有功会員 大野 雅二

永年会員 相見 則郎 遠藤 豊成 小見 邦雄 黒部 俊夫

近藤 由利子 渋谷 皓 庄村 知子 武信 貞夫
田中 仁一 名取 俊二 水柿 道直 山本 肇

2) 財政基盤の確立

(1) 貸貸収入と会館の運営

学会運営は、会費と学術事業収入等の経常収入によって賄われるべきものではありますが、本会では会館の貸貸収入をもって学会運営の財務基盤を補完しております。貸貸事業は社会情勢の影響を多分に受けることから、常に状況把握を行い、管理代理者である三菱UFJ信託銀行と連携を密にし、運営基盤の安定化に資するよう努力してまいりました。

学会が管理する会館施設の運営は、会員の利用施設としての有効活用と、一般社会への開かれた学会としてのイメージアップのため、委託先のビル管理会社と協力して利用者の便に供するよう努めました。

(2) 長井記念館の維持管理

当館の経年劣化に伴う修繕計画について、三菱UFJ信託銀行を始めとする関係各社からの情報を基に、主体的に把握するよう努めてきました。2018年11月に立体駐車場の改修に着手し、同月内に工事を完了しております。

また、2018年3月より行われておりました会館1階～8階の空調設備改修工事は順調に進んでおり、2019年3月中に終了する予定です。

2018年度役員一覧

会 頭	奥 直人 (帝京大薬)	
次期会頭候補副会頭	高倉 喜信 (京大院薬)	
副 会 頭	佐々木茂貴 (九大院薬)	牧野 公子 (東京理大薬)
常任理事	吉松賢太郎 (日本薬学会)	
総務担当理事	大和 隆志 (エーザイ)	平井みどり (兵庫県赤十字血液セ)
	奥田 晴宏 (国立衛研)	
財務担当理事	堀本 眞吾 (田辺三菱製薬)	石井伊都子 (千葉大病院薬)
広報担当理事	賀川 義之 (静岡県大薬)	望月 眞弓 (慶應大薬)
国際交流担当理事	國嶋 崇隆 (金沢大院医薬保)	鈴木 洋史 (東大院薬)
編集担当理事	新井 洋由 (東大院薬)	土井 健史 (阪大院薬)
	大戸 茂弘 (九大院薬)	
学術事業担当理事	青木 一真 (第一三共)	寺崎 哲也 (東北大院薬)
	鈴木 利治 (北大院薬)	松岡 一郎 (松山大薬)
	松崎 勝巳 (京大院薬)	
監 事	高柳 輝夫 (ヒューマンサイエンス財団)	
	高山 廣光 (千葉大院薬)	春田 純一 (阪大院薬)

2018年度委員会・支部・部会一覧

常置委員会

役員候補者選考委員会
代議員選挙管理委員会

平井みどり (兵庫県赤十字血液セ)
平井みどり (兵庫県赤十字血液セ)

学会賞選考委員会	竹本 佳司 (京大院薬)
創薬科学賞選考委員会	中島 元夫 (SBI ファーマ)
教育賞選考委員会	滝口 祥令 (熊本大院生命科学)
佐藤記念国内賞選考委員会	松永 民秀 (名市大院薬)
創薬セミナー委員会	大高 章 (徳島大薬)
広報委員会	米持 悦生 (星薬大)
ファルマシア委員会	松木 則夫 (東大)
学術誌編集委員会	細谷 健一 (富山大院薬)
薬学雑誌	賀川 義之 (静岡県大薬)
CPB	中島 誠 (熊本大院薬)
BPB	大槻 純男 (熊本大院薬)
総務委員会	高倉 喜信 (京大院薬)
人事委員会	奥 直人 (帝京大薬)
財務委員会	高倉 喜信 (京大院薬)
国際交流委員会	佐々木茂貴 (九大院薬)
年会問題検討委員会	奥 直人 (帝京大薬)
薬学教育委員会	平井みどり (兵庫県赤十字血液セ)

特別委員会

長井記念薬学研究奨励特別委員会	佐々木茂貴 (九大院薬)
男女共同参画委員会	高倉 喜信 (京大院薬)

支部

北海道支部	原島 秀吉 (北大院薬)
東北支部	福永 浩司 (東北大院薬)
関東支部	辻 勉 (星薬大薬)
東海支部	日野 知証 (金城学院大薬)
北陸支部	中西 義信 (金沢大院医薬保)
関西支部	中川 晋作 (阪大院薬)
中国四国支部	坪井 誠二 (就実大薬)
九州支部	家入 一郎 (九大院薬)

部会

化学系薬学部会	竹本 佳司 (京大院薬)
医薬化学部会	高山 廣光 (千葉大院薬)
生薬天然物部会	掛谷 秀昭 (京大院薬)
物理系薬学部会	嶋田 一夫 (東大院薬)
構造活性相関部会	中川 好秋 (京大院農)
生物系薬学部会	青木 淳賢 (東北大院薬)
薬理系薬学部会	南 雅文 (北大院薬)
環境・衛生部会	永瀬 久光 (岐阜医療大保)
医療薬科学部会	大谷 壽一 (慶応大薬)
レギュラトリーサイエンス部会	矢守 隆夫 (医薬品医療機器総合機構)